

■■ 小鳥と熊の話 ■■

小 鳥

と もち

肥後の砥用（下益城郡）の町に入って、まっさきに眼についたのは、軒に小鳥の籠を吊るして啼かせている家の多いことであった。同じ肥後の馬見原の町などでも、そういう感があったが、ここはことさら眼につく。やはりメジロが多かったが、ヤマガラ、ヒタキなどもいる。瑠璃色の翼を持ったこの地方でズーという小鳥はヒタキの類と思われるが、これが最も人気があるらしい。

「何といってもズーが一番だ……」などと、軒先に立って語る声も聞いた。よいのは一羽五円ぐらいで売買されるという。

砥用は阿蘇の外輪山南の矢部高原を、さらに南に越えた山間の町で、五箇ノ荘の北の入口に当たるのである。

小鳥を盛んに飼っていたことは、五箇の山村も同じで、この方がむしろ本場である。七郎次官林から二本杉を踰えて、はじめての村である。腰越に入った時、路上の家から、チーと強くメジロの啼き音を聞いた時は、何かしらこの初見の村から語りかけられたように思った。特有な草屋根から、静かな小鳥のさえずりの音が流れて来るのはことに懐かしかった。梅の盛りで、どの屋敷にも屋根に沿って白い播き散らした如く花が咲いていた。

われわれは不用意にゆかしいとか、やさしいなどといって、上流社会から、漸次受け継いできた感情のように思いがちであるが、山の人々が、小鳥を愛好する気持ちなどは、おそらく古い古い伝統を遺したもので、その昔の、狩猟生活時代からの引きつぎで、寝殿造りにつづく廻廊や、御簾の影を通して来たものではなかったろうと思う。

猟銃を執って一たび山に入れば、猪、鹿を追って、飽くなき活躍を見せた荒くれの一方には、小鳥の挙動をやさしい目つきで見送っている。山小屋の住居で、木挽とか杣が、幾つもの小鳥を飼っていたのなども、たんに山住居の無聊を慰めるための発明ではないであらう。

は き

五箇ノ荘葉木村の緒方さんなども、軒にズーの籠を引っかけていた。夜になると、囲炉裏の傍らに持ち込んでそこに吊るしておく。毎年巣を探して飼いつけるとかで話はなかなか尽きぬ。山の中のことで、冬分は川魚を獲るに困難なために、播り餌の原料に不自由をするそうだが、このごろは花鰹などを用意してそれを使用する。前裁から青い菜の葉を摘んで来て、米糠と豆の粉に、それに花鰹の少量を混じて播り餌をつくる。人間が稗や玉蜀黍を食べていたのだから、播り餌の原料も粗末である。夏分山の作小屋に入り込む時の

籠を携えて行く。冬から春へは毎朝一回の餌つけですますが、夏季はどうしても二回に分けて与えぬと腐敗するという。

バツタリという網罟でも捕るが、それでは餌つきがよくない、やはり雛から捕って来る。「こいつの兄弟は三羽いましたが、所望されて今はこれ一羽になった。また誰か欲しがるとかも知れぬ。熊本の知人に前から頼まれているが、一羽では手離せない。もう一月も経てば、羽毛がずっと美しくなります」とも語っていた。

熊

九州に熊が棲息するか否かについては、ひところ動物学者の問題にもなったらしいが、いたことは事実らしい。昭和七年大分県阿蘇野の村を歩いた時、近くるだけくの黒岳で熊を捕った話を聞いたが、五箇ノ荘でも捕ったというものが幾人かいる。久連子村の緒方兵馬という男くれこはもう死んだが、洞ろ木のなかで一時に三頭を獲った話がある。

熊は殺してから横にして置くと、胆が流れてしまうとは、遥かに東国の三河、遠江などの狩人の間にも語られているが、五箇ノ荘にも同じ説がある。もう六十余年も前に、久連子で一頭の熊を捕った時に、商人の来るまでの間、胆が流れるとあって、梯子に前後の肢を括りつけて、あたかもはりつけになったもののようにして立たせておいた。これは今年九二歳の老媪の実見話である。

久連子村の平盛氏は、今年四三、四で、先天的に狩に趣味を持つ人であるが、その父なる人は、五箇ノ荘を通じても、有数な狩の名とりであったそうだ。その家には猪の下顎骨を二百幾十個か所蔵していて、座敷の欄間に何段にも飾ってあったというが、惜しいことに昭和の初めに火に遭って失ってしまった。その父なる人が亡くなる少し前に、平盛氏にくれぐれにこれだけは背くなと言って教えたことがある。狩をするのは結構なことだが、熊ばかりは進んで捕るな、しかしむかわれたら、これは狩人の意地で殺せ——と。そのわけというのは、熊を捕るにはどうしても頸の月の輪を撃たねばならぬ。月の輪を狙うこと自身は構わぬが家族が難儀をする。不具の子が生まれるからと言いつつ遺したそうである。

一般に熊の急所と伝えられる月の輪と子供の関係は、何かしら古い古い信仰の断片を語るもので、これもおそらく都会などから中途に持ち込まれた思想ではなかったように思う。そうして、むかわれたら用捨なく殺せという教訓なども、獵人の意地を示したものと見られ、似たような話は私の貧しい手帳の中にも、まだ幾つか各地の例が書き留めてある。